



カントウータ  
*Cantuta*

No. 57



大地の恵み：トウモロコシ畑で実りを待つ 比嘉徹氏（コロニア・オキナワ）

写真提供：風景写真家 松井 章氏

1. 日本人移住地訪問記（1）

コロニア・サンファンとコロニア・オキナワを訪ねて ……………松井 章

2. 初のアフリカ大陸・タンザニア滞在記（その5）

……………上崎 雅也

3. ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を  
生き抜いた人々— 9

……………渡邊 英樹

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

## 1. 日本人移住地訪問記（1） ：コロニア・オキナワとコロニア・サンファンを訪ねて

風景写真家 松井 章

### 1. 日本人移住地を訪問するきっかけ

ボリビアには2つの日本人移住地があります。サンタクルス州のコロニア・オキナワとコロニア・サンファンです。この2つの移住地（コロニア）は、戦後に集団移住した人々に建設されました。

日本人移住地という存在を知るにつれ、もし写真家として撮影するとしたら、そこに大切な意味があるのではないだろうか。現代日本がすでに失った日本人の面影をボリビアの日本人移住地に感じ取るかもしれないとも直感しました。



写真1-1 アマゾンを開墾する：苦難の道と希望の道

ボリビアの日系社会はペルーやブラジルの日系社会とは異なる歴史を持っています。そして、日本ではそのボリビア日系社会について、なぜかほとんど知られていないことに、私なりに疑問を感じました。日本人の同胞が、南米の大地に根ざしていることは、日本の私たちを勇気づける大きな存在です。それを知ってもら

うことはとても意義があると思うからです。

「写真」を通して、ボリビア日系社会を少しでも紹介することができないものだろうか。もちろん、私自身の世界観を広げることができるかもしれない、という好奇心が大きく後押ししました。

インターネットで調べても、わずかな情報しか得られないなか、日本ボリビア協会の会報誌「カントウータ」から渡邊英樹氏の著作『ボリビア開拓記外伝』を知りました。しかし、この本の入手は困難で日本ボリビア協会に連絡して、事務局の細萱恵子理事から渡邊英樹氏を直接ご紹介いただきました。著者ご本人様とお目に掛り、入植当時のお話などを伺いながら、貴重な情報をご提供いただけたのは、とても幸運なことでした。

軽快な筆致の著作を通して、約70年前に始まる開拓の困難と、それでも失われない未来志向な歩みにすっかりと魅せられました。この土地に暮らす人たちを知り、できれば写真に撮りたいと思いました。

### 2. 日本人のボリビアへの移民の歴史

日本人移住地を知るためには、まずボリビアへの移民の歴史を知ることは大切です。今年は「日本人ボリビア移住125周年」と「コロニア・オキナワ入植70周年」でもあります。最初の日本人のボ

リビアへの移民は、コロニア・オキナワやコロニア・サンファンへの移住から遡ること、さらに約55年前の1899年（明治32年）でした。

ペルーからアンデス山脈を越えてやって来た人びとが、ボリビアでのまさに最初の日本人です。当時、日本から多くの移民がペルーに来ました。しかし、移住先での過酷な生活に苦しむ人も多く、言わば逃亡するような形で隣国のボリビアへ再移住を試みたものです。



写真1-2 サトウキビを運ぶトラックが行き交うオキナワ移住地

第一次大戦前、世界的なゴム需要に合わせて、ボリビア北東部のアマゾンにあるリベラルタには、空前の天然ゴム景気が到来していました。最盛期にはリベラルタに移住した日本人の総数は約800人にのぼり、彼らはゴム採集の労働をしていました。

その後、天然ゴム景気の終焉と共に、日本人移民の中にはアマゾンを離れて、ラパス等の都市圏にも住み、商店やクリーニング業などを生業とする人々が現れます。この時代の日本人移民がボリビアに

定住した最初の日系人として、その地歩を固めました。第二次大戦後の集団移住も、その日系人たちが敗戦で困窮する日本人を救う目的で呼びかけたことで始まります。



写真1-3 日本米や果樹の生産、養鶏で栄えるサンファン移住地

### 3. コロニアの人たちとの出会い

ボリビアの日本人移住の歴史を学ぶなかで、ナタリア・サラサール駐日ボリビア臨時大使がコロニア・オキナワとコロニア・サンファンから来日している3人の若者を招き、お話をする場を用意してくれました。彼らの話を聞くことで、日本人移住地の今の姿を想像できました。たとえば、8月に盆踊りが開催されることなどを聞くと、ボリビアに息づく日本の文化とはどのようなものか興味はさらに大きくなりました。



写真1-4 サトウキビの種まき (オキナワ移住地)

そして、若者たちの一人である仁田原晃美さんをお願いして、地元の方を紹介していただきました。サンタクルスSancti Spiritusの黒岩幸一さん、サンファンSan Juanの池田潤平さんです。お二人と直に連絡をすることで、いよいよボリビア取材の最初の一步が始まりました。

この取材準備の時には、日本ボリビア協会の椿秀洋会長と事務局の吉田憲司理事にお会いしてボリビアの貴重な情報をいただいたことも一つの重要な転機です。在サンタクルス領事事務所の岡本弘領事を紹介されて、当地では温かく応援していただきました。



写真1-5 大きな空と畑を耕すトラクター (サンファン移住地)

ボリビアの撮影を決めてから、色々な方とお話を重ねて半年ほどが経つ頃に、ようやくボリビアへの出発となりました。

<つづく>

### 編集部からのお知らせ

#### 【オリジナル・フレーム切手】

「日本・ボリビア外交関係樹立 110 周年  
及び日本人のボリビア移住 125 周年」

### 記念切手の販売

本稿の著者である松井章氏の撮影したボリビアの写真が日本・ボリビア外交関係樹立 110 周年及び日本人のボリビア移住 125 周年を記念する切手となって販売されました。

8月に開催した松井章氏の写真展「ボリビアを知ろう」に来場された柘植外務副大臣のご示唆により、ボリビアへの友情の印として、緊急発行されることになりました。

※2024年9月17日(火)16時から、「郵便局のネットショップ」にて販売されます。

郵便局では販売されません。

※現在在庫なしとなっております。

フレーム切手 1シート 1500円

※郵便局ネットショップ

[https://www.post.japanpost.jp/kitte\\_hagaki/stamp/frame/detail.php?id=3111](https://www.post.japanpost.jp/kitte_hagaki/stamp/frame/detail.php?id=3111)

※また外務省のHPでもご紹介いただいています。

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/la\\_c/sa/bo/pageit\\_000001\\_01061.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/la_c/sa/bo/pageit_000001_01061.html)



## 2. 初のアフリカ大陸・・タンザニア滞在記（その5）

一般社団法人日本ボリビア協会  
常務理事 上崎 雅也

### 1. 再度、中国の話に戻る

私が出向していた産業貿易投資省  
Ministry of Industry, Trade & Investment -  
MITIを始め、多くの官庁は、2018年6月の  
マグフリ大統領（当時）からのあまりに  
突然の憲法上の首都ドドマ市への官庁移  
転指令により、入居する建物の建設が間  
に合わず(建設計画すらなかったはずだ)、  
写真の国立ドドマ大学学生寮の空いたス  
ペースを借用していた。



写真2-1 事務所に転用された大学寮

ドドマ大学は、殆どすべて中国の援助  
で設立された（中国の支援がなければ大  
学の設立にも至らなかったであろう）の  
で全面的に中国企業が建設した。トイレ  
も中国式（日本の昔の厚生省式トイレが  
水洗式になっているだけ）であった。

トイレや洗面台の設備にも中国メー  
カーのロゴが記載してある。まあ、将来の  
拡大を念頭に学生数以上に建物を建てた  
ことでタンザニア政府としては、随分あ  
りがたかったであろうと想像する。中国  
から見れば、戦略通りで、必ず孔子学院

を設置し、相当数の中国語教員を送り込  
んできている。当時米国では、中国政府  
の宣伝機関であり閉鎖させるべきだとの  
批判が相次ぎ、世界各地で閉鎖に追い込  
まれたが、ドドマ大学ではその後どうな  
ったのか気になるところだ。因みに、孔  
子学院の中国語教員は、絶対に現地の言  
語を身に着けてはいけない規則らしい。  
徹底している。



写真2-2事務所にしていた学生寮の部屋

大統領からの移転指示の有無に関わら  
ず、着任当初から私のデスクが確保出来  
るのか心配だったが、ある副局長から空  
いた小さなデスクを提供してもらった。  
写真中央左の大きな木製机が副局長のデ  
スクで右後方の壁に作り付けのものが私  
のデスクである。左側にも同様のデスク  
があり副局長のプリンターが置かれてい  
るが、そもそも学性二人が寝泊まりする  
為に設計された部屋なのだ。椅子の背も  
たれに掛けてある日の丸は、退職前に勤  
めていた会社の同期から預かったもので  
「お国の仕事」ゆえ、頑張れ、とのあり  
がたい激励である。残念ながらこの旗を  
しっかりと掲げられるスペースがなくて  
写真撮影時だけこうして掲げさせてもら  
った。デスクは幅が狭くて、私の大きめ

のプリンターを置けないので、結局自宅  
で使っていた。それもあって、打合せの  
無い日は、事務所に行かず、自宅で執務  
していた。

忘れてはいけない。MITIのある職員は  
私がJICAから派遣されたと知って「中国人  
ですか?」と聞いてきた。日本政府と中  
国政府の区別がつかないのだ。違う国だ  
と説明したが、あまり意に介さず「何れ  
にせよどちらも経済協力してくれる大切  
な友人です。」と返ってきた。中国人と  
間違えられるのを嫌がる人が多いが、政  
府職員でも、日本と中国についての認識  
は、こんな程度だ。

私もMITI事務所の廊下で、タンザニア  
人職員から「ニイハオ」と笑顔で挨拶さ  
れることが多かった。中国から派遣され  
た援助関係者ともすれ違う。中国は、援  
助をすべて中国企業だけに任せるから地  
元にお金が落ちないといった批判が、ア  
フリカ各国にある様でタンザニアでもそ  
ういった批判は、耳にするが、一方でそ  
れに劣らず、中国に感謝している人もい  
る。あまり日本は、否定的見方ばかりし  
ない方が良いでしょう。

実際、先述の「孔子学院」の教育効果  
は、著しいものがあったと言って過言で  
はなく、学生食堂では、よく現地の学生  
から中国語で話しかけられた。中国語の  
運用能力も高く、中国人の先生と数分間  
会話を続ける学生も散見された。日本か  
らは、残念ながらJICAが派遣する青年海外  
協力隊員が一人日本語講師として週に数  
コマの授業を持っているだけであった。

残念だが、日本語を学ぶ学生と中国語を  
学ぶ学生とでは、数の上でも質の上でも  
相当の差があったように思う。

カントゥータ第53号掲載の(その2)で  
も触れた通り、私が滞在した当時、中国  
は、ダルエスサラーム港の北側バガモヨ  
に新港を建設してアフリカ東岸の発展に  
大きな役割を果たそうとしていた。中国  
政府が推し進める一帯一路政策の中でも  
大きな位置を占める重要案件なのだが、  
2019年以降、タンザニア政府との協議が  
うまく行っておらず、大きな進展は、し  
ていない模様だ。



図2-1 バガモヨ港完成予想図(2019年当時に発表され  
たもの)

現在は、一帯一路政策全体が足踏みし  
ている状況の様だが、同じスケールのプ  
ロジェクトを支援できる国は、中国以外  
になかなかないだろう。いつ動き出すか  
検討が付かないが、中国とは、適度な距  
離でうまく付き合い、日本企業がビジネ  
スに結び付け得るチャンスがあれば良い  
と私は、思っている。ただ、その為には  
日本も相当厚かましく彼らの横に割って  
入るぐらいの覚悟も必要だ。

## 2. だけど中国だけじゃない

私がタンザニアに勤務していた当時、

経済面で大きく注目を集めていたのが東アフリカにおけるライバル国であるエチオピアや、既にケニアで運行を開始していた新幹線と同じレール幅（1.4m超）の標準軌鉄道(Standard Gauge Railway-SGR)の話題であった。東アフリカ諸国では、英国の植民地時代に明治時代の日本と同様、幅約1mの狭軌鉄道が敷かれたが、何れの国でも適切なメンテナンスが出来ず老朽化が激しくなり、現在各国とも刷新の段階に入っている。タンザニアでもこれまではダルエスサラームを起点とする老朽化した狭軌の鉄道が主力であったが2024年6月14日からいよいよSGRが営業を開始した。

次の写真は、韓国から購入した車両である。駅舎も非常に未来的で斬新なデザインで設計されている。残念ながら南米大陸は、巨大なアンデス山脈が鉄道建設への大きな壁となる上、将来大きな人口増も望めそうにないので、この種プロジェクトは、現実的とは、考えにくい様に筆者には、感じられる。ただ、今後、アフリカの成長をどう南米諸国が取り入れることが出来るかを検討することは、重要だろう。



写真2-3 開通したSGR車両外観（タンザニア鉄道のチケット予約サイトから拝借）



写真2-4 車両内部（写真2-3と同様）



写真2-5 新設されたSGR鉄道ドマ駅

そのような状況下、多くのアフリカ諸国が中国の援助を受けて鉄道を建設しているが、まずエチオピアで東海岸のジブチからアディスアベバの759kmの区間にSGRが建設され2016年10月から運航を開始している。ただ、電力不足で十分な電力供給を得られず、予定通りの運行が出来ず収入も乏しいため、2023年12月からエチオピア政府は、債務の返済を停止する事態となり、事業の継続を危ぶむ声も出ている。

ケニアではナイロビーモンバサ間490kmに中国の経済協力でSGRが建設された。こちらは、中国側のプランによると2030年には、ウガンダの首都カンパラへの延伸が計画されている。債務の返済が国家財政

の大きな負担になっており、ケニア政府は債務の罠に堕ちたとの批判を受けている為か、中国政府が事業のオーナーシップに自ら参画することも要求している様だ。さて、タンザニアは、6月14日に運行を開始したとはいえ、果たして継続するだけの資金力や人材力があるのだろうか… 非常に大きな課題だ。

第1段階のダルエスサラームーモロゴロ間300kmの建設資金12億米ドルは、中国ではなくトルコの輸出信用銀行から借入れ、建設はトルコとポルトガルのコンソーシアムが実施した。6月14日に運行を開始した。300kmを90分で走るとのこと。旅客、貨物輸送とも順調に進むことを祈りたい。

タンザニアでは、更にこの路線のドドマへの延伸、更にはヴィクトリア湖畔のムワンザ、隣国ザンビアやコンゴ民主共和国に繋がる路線計画も検討されているらしく、当然ながら中国の援助も予定されているようだ。債務の罠を案じる声もあるが、それは、1980 - 1990年代にかけて世界銀行、国際通貨基金 (IMF) 他、地域別の国際開発銀行、更には西側先進国の民間銀行などから多額の借金をして、首が回らなくなったのは一部のアジア、アフリカ、中南米諸国も経験してきたことで、私には、その事実に最早、誰も触れようとしたくないのは、おかしな話だと思える。ボリビアとて対外債務の返済問題については、随分苦しんだ過去がある。ただ、然様な懸念とは、裏腹にアフリカの物理的な経済発展は、確実に進んでい

る。

### 3. 民族と奴隷制度

話題が変わって、16世紀、17世紀当時の「異民族間の遭遇」を想像してみたい。まだ旧世界の欧州人たちとアフリカやアメリカ大陸の先住民が遭遇した時お互いにどんな第一印象を持っただろうか。この外見や文化・伝統の違いが偏見を呼んで、絶えることのない差別を生んでいるのは、確かだ。

アフリカに住み始めてみて、肌や髪の色、体格など外見が大きく異なるこの人たちの心からの優しさや、親切に接してみても、すぐに感じるのは、アフリカの居心地の良さだ。俳優の故渥美清氏が大のケニアファンだったことは、よく知られているし、学生時代に或いは青年海外協力隊でアフリカを訪れてファンになり、ビジネスを始めたり、現地の人と結婚する日本人も多い。

男性は「田舎の優しいおっちゃん」、女性は「包容力のある肝っ玉母さん」というのが第一印象だ。現代日本の少なくとも都会では、もうこの種、昔風の男女は、レッドリストに載っていて生息数が非常に限られているように思える。まして、都会のギスギスした世間で育ってしまった若者が将来、こんな大人になれるだろうか。難しいように感じる。しかしそんな優しいアフリカの人々の歴史的苦勞は、大変なものだ。

アフリカを語る時、避けて通れないのが「奴隷制度」の話題だ。誰もが知っ



ている南北アメリカ大陸への奴隷は、主として16世紀から18世紀の間に、西海岸（今日のナイジェリア周辺、今でも『奴隷海岸』と呼ばれる）から送り出されて18世紀には、「その1」でも触れたが世に知られる「三角貿易」を構成した。つまり欧州からアフリカの植民地向けの酒や武器を積んで出航した船は、西アフリカで黒人奴隷を積み込み、西インド諸島（現在のキューバ、ドミニカ、ハイチ、ジャマイカ等）のプランテーションに送り込み、アメリカ大陸からプランテーションの産物である綿や砂糖を欧州に持ち帰ったという貿易構造である。西インド諸島に送られた奴隷は、更にブラジル他の南米にも送り込まれプランテーションや鉱山労働に駆り出された。そこには、当然ボリビアのポトシ銀山も含まれる。

その後、17世紀に入ってから米国南部の綿花プランテーション向けに大量の奴隷が輸出されることになる。もともとアメリカ大陸には、我々と同じ蒙古斑を持つ北米インディアンやインディオと呼ばれる先住民が住んでいたこと、そしてマヤ、アステカ、インカ等数多くの先住民文明が開花していたことは、よく知られている。またコロンブス一行の米州大陸到達後、16-17世紀にかけてスペイン人に征服されて、欧州から到来した疫病や金銀を漁る欧州からの来訪者による強制労働の影響で先住民人口が急減したこともよく知られている。この急減の要因の一つが、我々アジア系の民族同様、決して肉体的に強くなく、強制労働に耐えられ

なかったという点が指摘されている。労働力不足を補うために体力強靱なアフリカからの奴隷輸入の需要が高まり新たな悲劇が始まったということだ。もしアフリカの人たちが肉体的にひ弱だったら、そんな運命が少し変わっていたかも知れない。

お恥ずかしい話ながら、アフリカに赴任してみて、初めて知ったことが二点ある。まず、アフリカでは、15世紀以前から、既に奴隷狩りが、存在していたことだ。当時、部族間の争いで捕虜になった者たちがポルトガルなど欧州人に奴隷として売られていた事実があり、まさにアフリカ人がアフリカ人を売買の対象にして金儲けしていた訳である。16世紀になり西海岸からアメリカ大陸に送られた奴隷達も、白人から武器を与えられた王国・部族が対立する王国・部族の人々を捕らえ、白人商人に売り渡した商品であった。

3世紀の間に南北アメリカ大陸に奴隷として送り出された人数は、1,000万人以上と言われているが、劣悪な環境の奴隷運搬船内で、疫病で死ぬ者や海に捨てられた者、脱走を企てて殺された者等を含めると送り出された人数は、軽く2,000万人を超えるという推計もあるらしい。

もう一点、タンザニアに来る前は「多くの奴隷がアメリカ大陸で苦しんだ」ことにばかり気がとられていたのだが（皆さんもそうだと思う）、アフリカに住んで初めて実感できたことがある。それは膨大な人口が、働き盛りの世代を中心に3

世紀もの長きにわたりアメリカ大陸に送り込まれたことが、如何にその後のアフリカ社会の発展への障害になったかという問題だ。

当時のアフリカでは、それなりに確立された社会が存在し、上記のとおり王国として栄えた地域もあった。多くの奴隷を送り出した現在のナイジェリアでは、「奴隷狩りの被害者」側部族と、「加害者」側部族の対立が激しく、今日でもこれが社会の不安定要因になっている。この最初の加害者がベナン王国の中心となるヨルバ人で、彼らは、キリスト教徒のイボ人を対象に奴隷狩りを行い白人商人に売り渡した。その後、自分たち自身も奴隷狩りの被害者となるのだが、同様の奴隷狩りで栄えた王国・部族は、現在のガーナやベナンにも存在した。18世紀には、西海岸での奴隷調達で人口減少で、間に合わず、ポルトガルの奴隷商人たちは東海岸（現在のモザンビーク）にまで奴隷狩りの手を伸ばした。

奴隷貿易の話に戻ると、当時のサハラ以南のアフリカの推計人口は、政策研究院大学大学院の林玲子教授のデータ <http://www.linz.jp/worldpop/jp07/> によると西暦1600年で7,880万人、1,700年で7,700万人と減少している。これは、間違いなく奴隷狩りの影響と考えられる。

奴隷狩りは、モザンビーク以外の東アフリカ、すなわちタンザニア周辺にも存在した。アラビア半島東岸のオマーン首長国は、18-19世紀にアラビア半島から東アフリカ一帯を支配する帝国を築き上げ

たが、その中心が今タンザニア連邦のひとつであるザンジバルであった。当時、フランスが植民地で奴隷を必要としていた為、イスラム系商人たちは、非ムスリムの黒人を対象に奴隷狩りを行い19世紀後半まで続いた様だ。

余談になるが、黒人初のメジャーリーガーとして有名なジャッキー・ロビンソン氏の祖父は、奴隷貿易が姿を消す直前に、現在のタンザニア南部から米国に送り込まれたことが知られている。いま、同氏のご子息たちが曾祖父の故郷で教育支援や産業開発など多大の社会活動をされている。同氏が入団したのは、当時まだ東海岸にあったブルックリン・ドジャース（現在のロサンジェルス・ドジャース）である。

幸い、タンザニアでは部族対立は存在しないので、この話題は、深掘りしないが、西海岸を中心に多くのアフリカ諸国では、奴隷狩りの歴史が国内の民族・部族対立や内戦の原因となっていることを頭の隅に留めて頂きたい。もう一つ付け加えるなら、同じアフリカ人同士で奴隷売買の歴史的構図を作ることに加担したことへの自責・後悔、或いは、被害者にもなった民族の怨嗟が入り混じった複雑な感情が彼らを支配しているようで、これは、我々には理解しきれないであろう。

「アフリカを知る」ことは「中南米を知る」ことと同様或いはそれ以上に細かい気配りが必要な作業と言える。

そんな共通感情もあってかアフリカの人たちの連帯は、強い。2018年6月に開催

されたサッカーW杯ロシア大会での日本vs.セネガルの試合で私は、大画面TVのあるレストランでビールを飲みながら、青年海外協力隊員たちと日本を応援したのだが、ほかの客は全員セネガルを応援し、圧倒的にアウェー感覚だった。2対2で引き分けた翌日、セネガル人でもないのに、職場の同僚が「日本の2点目は、俺たちのゴールキーパーのミスのお陰だった。」と悔しがっていた。同大会の優勝国は、フランスだったが、優勝した翌日のタンザニアの一部新聞の見出しは、「アフリカの勝利!」だった。フランス代表選手の殆どが、いまやリアルマドリードの中心選手であるスーパースター、キリアン・エムバペを始め、アフリカ系だったことは、言うまでもない。

以上

### 3. ボリビア開拓記外伝

#### —コロナオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々—9

日本ボリビア協会相談役

渡邊 英樹

#### 第三部 ジャングル開拓最前線

こんめい にほんじんいじゅうち  
混迷する日本人移住地

にっせいれんじけん  
日生連事件

ところで、私がボリビアに派遣されたのはある密命を受けてのことであった。

それは「サンファン旧債」と称された不良債権の回収を図るというものであった。

1960代に入る頃には、長崎県

出身者が多数を占めるサンファン移住地

の全ての農家が米の生産で生計を立てていた。まだ機械化耕地はなく、原生林や再生林に火を放ち山焼きをして、木株の間に、陸稲の種を落として埋め込んでいき、収穫は穂先だけを摘んで行く焼き畑農法であった。この米作が移住者の生活をかろうじて支えていた。

その生産米の販売効率を高めることを目指して、収穫直後の米価の安い時の出荷を避けて高値の販売を図るためサンファン農協は、日本海外移住振興

株式会社（全額政府出資）から6万3千

ゆうし う せいまいき かんそうき せっち  
 川の融資を受けて精米機と乾燥機を設置  
 した。

どうよう ことあ  
 同様に、コロニアオキナワも1戸当  
 り10畝の米を栽培しており米作が主幹  
 さくもつ せいまいき  
 作物となっていた。そこから、精米機と  
 かんそうき ゆうこうりよう はか こうそう も  
 乾燥機の有効利用を図るという構想が持  
 あ りよう  
 ち上がり、サンフアンとオキナワ両  
 いじゅうち きょうりよくれんけい にほんじん せいさん  
 移住地が協力連携して、日本人の生産  
 まい ちめいど こうじょう かつこ しじょう  
 米の知名度の向上と確固たる市場の  
 せんゆう はか もくてき ねん がつ  
 占有を図る目的で、1963年11月に  
 にっせいれん にほんじんいじゅうちせいさんぶつほんばい  
 「日生連（日本人移住地生産物販売  
 れんごうかい せつりつ  
 連合会）」が設立された。



写真3-1 3-2 原生林に火を放ち、焼き畑を作る  
 コロニア・オキナワの農業（1969年筆者撮影）

こうそう りっぱ  
 ところが、これは構想だけは立派であ  
 けいかく きわ あま  
 ったが計画は極めてずさんで甘いもので  
 かんじん かんそうき しよりのうりよく ぞうさん  
 あった。肝心の乾燥機の処理能力が増産  
 つづ せいさんまい はんぶん たいおう  
 され続ける生産米の半分にも対応できな  
 ったのである。しかも、日生連の担当  
 にっせいれん たんとう  
 者は、処理能力の遅れへの不満と圧力  
 しゃ しよりのうりよく おく ふまん あつりよく  
 に抗しきれずに、十分な乾燥をせずに  
 こう じゅうぶん かんそう  
 出荷してしまうという致命的な過ちを犯  
 しゅうか ちめいてき あやま おか  
 してしまった。

わざわ にほんじん せいさんまい  
 これが災いして、日本人の生産米は、  
 れつとうまい ひょうか はんばい  
 劣等米と評価されるようになって、販売  
 かかく げらく いっど  
 価格は下落の一途をたどった。さらには  
 せいまい かんそう ま あ みこ  
 精米と乾燥が間に合わないことを見越し  
 のうか くみあい にっせいれん とお がいぶ  
 た農家が組合と日生連を通さずに、外部  
 せいまいじょ りよう ぬ う  
 の精米所を利用して、抜け売りせざるを  
 え じたい にっせいれん ほつそくご  
 得ない事態となり、日生連は発足後、わ  
 かげつ ほうかい  
 ずか10カ月で崩壊した。

わる つづ かちゅう  
 悪いことは、なお続く。この渦中で、  
 のうきょう こいん きんせんおうりよう  
 サンフアン農協の雇員による金銭横領  
 じけん お せきん にっせいれん  
 事件が起こった。その責任と日生連の  
 せきんもんだい めぐ いじゅうしゃかん たいりつ  
 責任問題を巡って、移住者間の対立が  
 げきか  
 激化した。コロニアサンフアンにおける  
 かくしつ はんすういじょう やくいん  
 その確執はすさまじく、半数以上の役員  
 けいけんしゃ かぞく きこく  
 経験者とその家族が帰国したばかりでな  
 やくいん たいりつ ひとびと  
 く、その役員と対立したほとんどの人々  
 いじゅうち しょうらい しつぼう きこく  
 も移住地の将来に失望して帰国するか、

よそへ転住するという事態になった。

移住者同士間、組合と移住者間、さらには組合の人事に介入した事業団の

所長の不手際もあり、移住地と事業団の間の三つどもえの相互不振は極限に達した。

日本人は天災に対しては、自然災害大国の長い歴史の中で「どうしようもない」という諦観境地の中から再建、再出発に向けてのDNAを持っているが、人災は、人の心を重くし、怒りと失望感が心を折れさせる。

この頃から移住地を去って転住する人が増加した。新たな出発のためには、1964年11月末までのサンフアン農協の債務を各組合員に均等に分け、旧勘定として棚上げして、新勘定をもつて組合の再建を図るということ以外に方法がなかった。

これが「サンフアン旧債」といわれるものである。

### 延滞債権回収の密命

こんな因縁のある債務を返済する意欲が、各農家に湧いてくるはずもない。

事業団も「移住地が豊かになってからで

よい」とことさらに回収を急ごうとしなかった。ところが、実に厄介な問題が生じてきた。

ボリビアばかりでなく、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、そしてドミニカと、どこの国の日本人移住地においても戦後の混乱期の「棄民」とも非難された移住政策によってインフラ未整備の土地に入植した移住者は悪戦苦闘を強いられていた。

当然の結果として、事業団の貸付金の回収は、惨憺たる結果であった。この遅々として進まない債権回収に業を煮やしたのが、時の大蔵省であった。まだまだ、日本の国力が十分とはいえない時代に、国民の血税を使つての貸付金を回収せずに、貸付予算だけを増やすということができなくなったのである。

一方、各移住地からは、瀕死の状態を救ってほしいという「カンフル注射」的な融資が切望されていた。しかし、

大蔵省は「回収実績+X円」として、回収実績がゼロであれば、X円しか貸し付けすることができないという「純増計画」という足かせを課してきたのである。この足かせで、一番困るのは、「サ

「サンファン旧債」と名前まで付けられて  
 棚上げ状態の債務を抱えたコロニアサン  
 ファンであった。

この硬直化した債権債務の関係を  
 流動化させて、回収を増やし、それと併  
 せて資金供給も増やして、各農家の  
 自立と拡大を図ってやらないことにはサ  
 ンファン移住地の発展は望めなくなる。

「それをどうにかしろ」というとんでも  
 ない命令であった。しかし、それを表立  
 ってやると移住地全体の反発をかって  
 終始がつかなくなるという。

日本を出発するに当たっては、白石  
 健次業務部長に、内々に呼ばれて「密か  
 に、しかし筋を通してやれ」と叱咤激励  
 された。

しかし、どうやって回収を図るか。ほ  
 とんどの農家は、まだまだ生活するのが  
 やつとの状態であった。その上に道路  
 事情も悪く農産物の出荷さえも、ままた  
 らない状態にたびたび見舞われた。サン  
 ファン移住地の幹線道路は36キロである  
 が、長雨によってドロドロになる。そこ  
 を農産物出荷のためにトラックやトラク  
 ターが運行するので深い轍ができてしま  
 う。

そして、厄介だったのは、コロニアサ  
 ンファンだけでは道路管理ができなかつ  
 たことである。奥地に入った伐採業者が  
 重い木材を積んで、強引に通るからであ  
 る。通行止めにしていただけの場所を銃を突き  
 つけて通るなどということが横行した。  
 陸稲に代わって基幹作目に育ちつつあ  
 った養鶏も、ズタズタにされた道路に  
 鶏卵の出荷を阻まれて、卵を腐らせてし  
 まうなどということが度々起きた。

ムシロ旗を立てた移住地からの陳情団  
 が、領事事務所と事業団支部を取り囲ん  
 だこともあった。陳情の中には戦後の  
 日本のおかれていた経済・社会情勢とは  
 いえ、十分なインフラ整備も行わずに  
 移住を推進した旧日本海外協会連合会  
 と、それを監督する外務省・日本政府へ  
 の非難と責任追及の意味も込められてい  
 た。



写真3-3 サンファン移住地共励区の道路（1971年サン  
 ファン事業所撮影）

「早急な解決策などはない」ということは誰にでも分かっている、どうにもならないいら立ちを受けて、コロニアの各地区の代表は抗議に来ざるを得ないのであった。

かつて白石健次支部長がサンフアン移住地の悪路の現場にガソリンをまいて火を放ったことがあった。それを見て、したり顔に「そんなことをしても無駄」と言い放った職員を烈火の如く怒ったという。そんなことが無駄なことは農業土木が専門の白石さんが一番分かっていたことであった。誰もが、充滿した不満のガス抜きを必要としていた。

こんな時に何もせずに逃げたら終わりである。誰からも信用されなくなる。一緒に悩んで一緒に知恵を絞り合い、とにかく何か行動に移すことが一番大切なのであった。

私にもこんな経験がある。やはり支部で20人くらいのサンフアンからの陳情の方々と対応した時である。何ができかほんとうに困り果てた。陳情に来た人からみかえを空身で帰してはならない。帰って村民に説明ができないからである。

そして、苦肉の策として思いついたの

が、ボリビア空軍に、鶏卵搬出のためにヘリコプターの出動を依頼するということであった。元空軍パイロットであった職員のオスナ氏を呼んで、皆さんの前で空軍に電話をしてもらった。

その答えは「バカヤロー、この空軍に何台ヘリコプターがあると思っているのか。たった2台しかないものをそんなところへ出動させられるか」というものであった。

それを聞いた陳情団の皆さんの方が、むしろホッとした顔になって帰っていかれた。

#### 頂上作戦

そんな状況の中で債権回収を図るといのは本当に難題であった。苦慮の結果、内々に「頂上作戦」と名付けた回収方針を実行することにした。

明らかに資金力のある人には強く返済を迫り、そうでない人には、少額ずつでもよいから返済してもらおうように説得して回るといことである。有力者たちからの強引な回収を図るため、コロニア中の宿舎に住んで家族生活をしているサンフアン事業所の職員にそれを任せる訳

にはいかない。発案者の私自身がこの役  
にあたらざるを得なかった。強烈な反発  
にあったことは言うまでもない。

サンフアン組合の総会に出席した時に  
は朝から晩まで一日中、つるし上げにあ  
った。しかし、不思議なほど冷静に対応  
できた。それは「国の失政がなかった」  
とは言えなかったし、もし立場が逆であ  
ったら、私なら、もっとひどいことを言  
っているに違いないと思えたからであっ  
た。

ただ、それだけにはとどまらず、私に  
対する誹謗中傷は東京本部にまで及ん  
だ。ところが「芸は身を助ける」という  
ことが起きたのである。私は、少年  
相撲の横綱を張っていて、小学校の昼休  
み時間の間、勝ち抜き戦を一度も負けず  
に午後の始業ベルを聞いたこともあり、  
高校時代はダンベルとリヤカーのチュ  
ーをクロールで泳いでいたので、体力に  
は自信があった。

当時、サンフアン祭の一番の人気は  
相撲大会で、大相撲の元幕下力士であっ  
た鎌田司さんの指導で高く盛り上げた  
本格的土俵が作られ、勝負を見ようとす

るたくさんを見物客で周りは埋め尽くさ  
れた。私も飛び入りで参加して、ことごとく  
対戦相手を負かして、最後はサンフ  
アン横綱との対戦になって、その方をも  
破ってしまった。

すると観衆の目が、いっせいに鎌田さ  
んに注がれて、事業団の若造を破って  
雪辱を果たしてくれと促しているのだ  
った。

この時、50歳近かった鎌田さんはと  
つくにサンフアン横綱を返上して引退し  
ていたが、土俵に上がらざるを得ない  
雰囲気を押されて出て来られた。相撲は  
やったものなら分かるが、組んだ瞬間に  
相手の実力は肌で感じる。私はとっさ  
に「この人の名誉を汚してはいけない」  
と判断して持久戦法に持ち込んだ。そし  
て水入り。再びの対戦も水入りとなり、  
鎌田さんの息の上がりを見た行司が引き  
分けとして勝負を終わらせた。

恐らく鎌田さんは私の気持ちを察して  
くれたのだと思う。土木工事班長のブル  
池こと池田篤雄さんが「鎌田のオヤジが  
『ワタナベにはケンカを売るな』と言  
回っている」という情報をもたらしてく  
れた。アンチ事業団のボスの存在の鎌田



さんであったから「ありがたい」と思っ  
たことは言うまでもない。

ところが、「好事魔多し」というか、  
まったく予期しない事態が起きた。先に  
サンフアン農協の総会においてつるし上  
げにあったと言ったが、それは、厳しい  
取り立てをする私個人に対する攻撃もさ  
ることながら、むしろ、それを口実とし  
て、日本政府の移住行政に対する不満の  
方が圧倒的に多かったのである。日本に  
居たときに海外協会の県事務所の職員  
から受けた説明と、ボリビアに来て実際  
に見た現実とのあまりにも大きいギャッ  
プに打ちのめされたその痛手から、ほと  
んどの人が立ち直っていなかったのであ  
る。

簡単に言ってしまえば「行政にだまされ  
た」という行き場のない憤りをみん  
なが心のどこかに抱えていた。そのため  
に、総会の議長も本来の組合の懸案事項  
の議事を進めようとしても、その不満の  
発露を封じ込めることができなかった。  
不満をぶつける相手は東京から来た派遣  
職員となる。

まさにボクシングのサンドバッグさな  
がらに朝から晩まで一日中攻撃ならぬ

口撃にさらされるのである。来賓とは名  
ばかりで、私が出席した時にも、激高  
のあまり、マチェッテ（蛮刀）を天井に  
向けて突き上げる人もいた。

ある日、支部長と私が、サンフアン  
移住地の視察に赴き組合事務所にあいさ  
つして辞そうとした時に事件が起きた。  
支部の職員の運転で支部長と私は後部  
座席に向かった。すると、宮原定組合  
長と田島支配人が、私の乗る方のドア  
側に回ってきて「お疲れさまでした」と  
頭を下げたのである。

これは、つるし上げを恐れて、支部長  
になってから一度も組合総会に顔を出さ  
なかったU支部長に対する痛烈な抗議の  
意思表示であった。元陸軍飛行機学校の  
校長を務めたこともあるというU支部  
長の顔色がみるみる変わったのは言うま  
でもない。なにを誤解したか「ワタナベ  
は、融資の責任者だから支部長より権限  
がある」と公然と言い出して、私にその  
職を解き、事業所への転勤を命ずる旨の  
内示を発表した。

本部の正式認可がくれば、すぐにでも  
転勤するつもりで妻と引越しの支度を  
していると総務の担当者が走り込んでき

て、U支部長に帰国命令が出て、内示も  
取り消されたという。

新たに赴任してきた末永昌介支部長  
は今まで通りで良いという。私は何もし  
てない。誰がどう動いたのか全く見当が  
つかない不可解な出来事であった。

その後の頂上作戦は、激しい抵抗も  
なく順調に進んだ。事業団に入った  
直後の宴会で、上司の陸軍士官学校  
出身の永田良三さん（後の細川護熙  
総理の事務所長）に、「君は頭でなく  
体で採ったんだ」とからかわれたが、そ  
れを、自らが、証明するかっこうにな  
ってしまった。

それはともかく、私のしたことはほん  
のわずかである。ほとんど全ての債務の  
返済を図り、資金の回転の流れをつくっ  
たのはサンフアン事業所で融資を担当し  
ていた坂口清さんと小林正人さんの誠実  
な、たゆまぬ努力のたまものであった。  
「旧債を返済しなければ、新規の融資が  
受けられなくなる」という理解が移住地  
の皆さんに浸透していった。

ちなみに、マッさんこと小林正人さん  
は長野県立野沢北高等学校の私の一年  
先輩である。マッさんが応援団長、私

は学校名物のバンカラ運動会の全てを  
仕切る運動部長という間柄で、真冬でも  
素足に高下駄、腰に手拭いを垂らしたマ  
ッさんを自転車の後ろに乗せたことが  
何度かあった。

マッさんは先輩風を吹かすことなく、  
私のために身を粉にして協力してくれ  
た。感謝の気持ちは今も薄れることはな  
い。ブラジリアに駐在していた時に胃癌  
を発症して亡くなられたのが残念でなら  
ない。幼い子供さんたちを残しての42  
歳の旅立ちであった。

お二人の努力の結果、1969年の  
3千万円から1974年には1億円へと  
貸付予算を3倍強まで増やすことができ  
た。

この貸付金を利用してコロニアサンフ  
アンは、営農の多角化を目指した。豊富  
な降雨量を利用して稲作も水田米を開始  
し、穀物、牧畜、養鶏、果樹、野菜をバ  
ランス良く組み合わせることによって  
天候や景気に左右されにくい営農形態へ  
と変身させ、今や、安定した経済基盤を  
確立するに至っている。

かつては、ここが人間が住む場所の行  
き止まりと思っていたヤパカニ川に橋が

か こうち とし どうろ ぞうせい  
架けられ、高地の都市への道路が造成さ  
れ、コチャバンバやラパスとの距離が、  
ぐっと縮まってコロニアサンフアンの  
農産物の販路拡大に貢献している。



写真3-4 現在のサンファン移住地共励区付近の舗装道路 (2018年筆者撮影)

スイカは「サンディア・ハボン」ポンカ  
ンは「ナランハ・ハポネサ」と品名の後  
に日本と付くと高品質を意味し、値段が  
高くても売れるようになっている。昔を  
知っている者にとっては、現在のサンフ  
アン移住地の姿は理想郷と映じた。

(つづく)

注記：これまでの写真および図は「コロニアオ  
キナワ入植50周年記念誌」から引用。  
※本書は、日系2世の人たちが読みやすいよう  
に全漢字ルビをふっています。



琉球新報社のご厚意で転載させていただきます。ご関心を持たれた方は下記琉球新報社URLをご覧ください。

<https://store.yukyushimpo.jp>

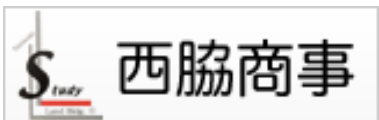
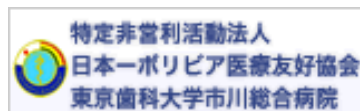
### ★スペイン語版が発刊されました☆

本誌で『ボリビア開拓記外伝』（琉球新報社 1900 円+税）の小分けの連載（全漢字ルビ付き）をしておりますが、そのスペイン語訳本『BOLIVIA REGISTRO DE UNA HISTORIA PARALERA』が、明石書店(2500 円+税)より出版されました。

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ポリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2024

**一般社団法人日本ポリビア協会**  
**ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA**

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)